



日本統計学会 会報 2008.10.25

No.
137

発行——日本統計学会
〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2階
(財)統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax : 03-5467-0483
編集責任—岩崎 学(理事長) / 倉田 博史(庶務理事)
福地 純一郎(広報理事) / 内田 雅之(広報理事)
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通 1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：計量経済学の今昔 ……前川功一… 1
2. 新理事長就任挨拶 ……岩崎 学… 3
3. 前理事長退任挨拶 ……田中勝人… 4
4. 第13回日本統計学会賞について
 - 4.1 日本統計学会賞 ……北川源四郎… 4
 - 4.2 受賞のことば ……竹村彰通… 5
5. 第4回日本統計学会統計教育賞について
 - 5.1 日本統計学会統計教育賞 ……北川源四郎… 6
6. 第2回日本統計学会研究業績賞について
 - 6.1 日本統計学会研究業績賞 ……北川源四郎… 7
 - 6.2 受賞のことば ……江口真透… 8
……………John B. Copas…10
……………柿沢佳秀…10
7. 第22回日本統計学会小川研究奨励賞について
 - 7.1 日本統計学会小川研究奨励賞 ……山本 拓…11
 - 7.2 受賞のことば ……黒住英司…12
8. 会員からの投稿記事

第3回Biostatisticsネットワーク参観の記

- ……………柳川 堯…13
9. 2008年度統計関連学会連合大会報告
 - 9.1 プログラム委員会報告 ……清水邦夫…14
 - 9.2 運営委員会報告 ……石岡恒憲…18
 - 9.3 コンペティション 受賞のことば
……………山本紘司…19
……………川野秀一…19
……………白石友一…19
……………松井秀俊…20
……………三浦 翔…21
10. 会長候補者推薦のお願い ……北川源四郎…21
11. 2009年度統計関連学会連合大会について ……22
12. 第76回統計学会総会報告 ……22
13. 研究部会新設公募 ……27
14. 研究集会案内 ……27
15. 新刊紹介 ……28
16. 学会事務局から ……28
17. 投稿のお願い ……29

1. 巻頭随筆：計量経済学の今昔

前川 功一（広島経済大学）

今から40年以上前に、大学時代に経済学の勉強を始めたものの、当時主流であった観念的な経済学になじめなかった。大学4年のとき（1996年）、当時翻訳出版されたジョンストンの「計量経済学の方法」（J. Johnston著、竹内啓訳、東洋経済新報社）がゼミのテキストとして使用され、データと数理モデルに基づいた計量経済学に出会い、非常に魅力を感じた。その後、広島大学で統計学の助手として研究を始めた時、研究分野として計量経

済学を選んだ。爾来40年以上経過したが、計量経済学は大きく様変わりした。大きな変化をもたらした要因はいろいろあると思うが、筆者の経験に基づく主観的意見を述べれば、変化をもたらした駆動力は大きく分けて3つあると思う。第一の要因はマクロ経済学における潮流の変化によるもの、第2はコンピュータの性能向上、第3はデータの充実ではなからうか。そのほかにベイズ統計学の発展による影響も大きかったが、これについ

ては門外漢なので本稿では触れない。

1970年代当時は、実証面ではマクロ同時方程式モデルの開発とそれに基づくマクロ経済の分析と予測が、また統計理論面では同時方程式の推定理論が学界の中心的課題であった。当時、大学や官庁で使用され始めた大型汎用機を用いて大規模マクロ計量モデルが開発され、政府の経済政策の策定に計量経済モデルが用いられたようである。コンピュータの性能が向上し、変数の数を増やしモデルを大規模化、精緻化していけば計量経済モデルの有効性は飛躍的に向上するはずだという期待感に満ちていたように思う。この時期、計量経済学の将来はばら色であった。しかし当時は、十分長い経済時系列は整備されていなかったため、短い時系列データを用いて推定せざるを得なかったため、計量経済学の理論では、小標本理論が最重要課題であった。その後、マクロ経済学の潮流の変化が起こり、マクロ経済モデルの限界が次第に明らかにされ、大規模マクロ経済モデルは学会の中心的研究課題としての地位を時系列モデルに譲ったといえる。当初はBox-Jenkins流の定常時系列モデルに基礎を置く経済時系列モデルの分析が主流であったが、やがて経済時系列データの観察から、単位根、共和分などの現象が発見され、単位根問題が計量経済学の理論における中心的課題として登場し、最近まで計量経済学研究の主要研究テーマであった。単位根に関する分布論を扱うために、計量経済学にウィナー積分表示が導入され、大ブレイクをもたらしたことは記憶に新しいところである。

コンピュータの性能が向上したことも計量経済学の研究スタイルに変化をもたらした。小標本理論が主流であったころは、同時方程式に関する推定量の精密分布の導出や、高次漸近展開のよる分布の近似を求める論文が脚光を浴びた時期があったが、精密分布の導出や高次漸近展開は非常に煩雑で、しかも結果が求められる場合が比較的単純な場合に限られていた。そのためか、計量経済学における漸近展開必要性、有用性を疑問視する議論があったことも事実である。そのような議論が

あったためか、または研究し尽くされたためか、その後、計量経済学の理論研究から漸近展開は次第に影をひそめ、筆者も研究分野を失い失業したような気分になったものである。計量経済学の研究分野が10年、20年という単位で大きく移り変わる現象は、上に述べたような要因のほかに、研究の最前線で脚光を浴びた研究分野といえどもやがては研究し尽くされて枯渇するという側面も無視できない。他方、研究分野の主役交代の背景には、研究が進んだ結果、理論が実用段階に入りルーティン化されたため、学界の主要研究テーマとしては扱われなくなったという側面もある。もう一つの計量経済学における最近の大きな変化として、計量ファイナンスに関する理論的、実証的研究の隆盛を上げることができる。筆者も最近では計量ファイナンスの実証分析に興味を持っているが、統計理論的に興味深い問題が多い分野だと感じている。

次にデータが整備され充実してきたことが計量経済学に及ぼした影響を述べる。筆者が計量経済学を勉強し始めたころに比べると経済データの蓄積が進み、当時に比べるとかなり長期時系列データが利用可能になった。さらに最近では、金融時系列データに関する、分・秒間隔に採取される高頻度データが利用可能になった。その結果、実現ボラティリティ (realized volatility, RV) が計算可能になり、RV分析がひとつの研究分野を形成されるまでに成長した。また高頻度データの分析が可能になったのは、コンピュータが高速・大容量化したお陰でもある。

データ環境のもうひとつの大きな変化は、一部ではあるが個票を用いたパネルデータが使用可能になったことによってパネルデータの理論的・実証的研究が進んだことが挙げられる。ミクロ計量経済分析の発展はこのようなデータ環境の向上が大きな要因になっている。豊富なデータが利用できるようになったことは歓迎すべきことであるが、しかし問題がないわけではない。高頻度データは非常に高価なので、研究費が潤沢な研究者にしか利用できないのが現状である。研究者及び研

究機関の貧富の差がそのまま研究成果の差として現れやすくなってきたことは否めないし、それは良い傾向とは思われない。また個票の利用については、個人情報保護との関係もあり、誰にでも利用できるわけではない。しかるべき手続きをとって許可を得れば誰でも利用可能かといえば、必ずしもそうとも言えない。特定の官庁と特権的な関

係にある研究者でなければ許可を得ることが難しいという状況はないか。研究の客観性（検証可能性）、公平性などに問題はないであろうか。このような状況を打破するために、大規模経済データベースを研究者の利用に供する機能を持った全国共同利用施設の設置を、学界として国に働きかけてもよいのではなかろうか。

2. 新理事長就任挨拶

岩崎 学（成蹊大学理工学部）



2008年9月8日に開催された日本統計学会評議員会で理事長に選出されました。歴代の錚々たる理事長リストを見ながら自分の特徴を探しましたが、これまで統計関連諸

学会で務めた理事と選出された評議員の回数であれば多少誇れるのではないかと思います。その結果、統計学会での4期を含め理事が20期、評議員が22期あることが判明しました。今後2年間は他学会では仕事を軽くして頂き、日本統計学会のために力を注ぎたいと思います。

現在、統計学には追い風が吹いています。統計に対する社会の要請にはかなり大きいものがあり、期待もされているという感触を受けることがしばしばです。また、官庁統計や教育面で追い風と思われる施策が実行されつつあります。問題はこの追い風にうまく乗れるかどうかです。私の郷里の浜松は凧揚げ合戦で有名で、私もご他聞に漏れず小さい頃は毎日勉強ならぬ凧揚げに精を出していました（当時は勉強している小学生などほとんどいませんでした）。そのおかげで、その日の風を読み糸目を長くしたり短くしたりの工夫を重ねて凧を揚げる技術は相当進歩しました。今でも自信はあります。

現在きわめて重要なテーマとして、学習指導要

領の改訂に伴う初等中等教育における統計の単元の新たな展開、および大学などの高等教育における統計の充実という統計教育の問題があります。理事会ではこの問題に積極的に関わっていくつもりです。

他方、目を海外に転じると日本の国際的な地位に揺らぎが見え、統計の世界でも日本の存在感をさらにアピールしていく必要を感じています。もちろん研究成果に国境はありませんが、「日本」統計学会としては日本の存在感をこれまで以上に目に見える形で主張していかなければなりません。これも理事会の課題です。

理事会の課題と申しましたが、実はこれは統計学会にとどまらず統計「学界」全体の問題です。統計関連学会連合の取り組みも軌道に乗りつつありますので、これら諸学会と連携を保ちながら、風を読みうまく乗って行きたいと考えています。

理事長略歴：1952年静岡県浜松市生まれ。1977年東京理科大学大学院理学研究科数学専攻修士課程修了。1988年理学博士（東京理科大学）。茨城大学工学部助手、防衛大学校数学物理学教室講師・助教授を経て1993年より成蹊大学に勤務。1997年教授。2006年より成蹊学園情報センター長を併任、現在に至る。

研究分野：コンピュータ利用の多変量データ解析法の理論と応用。処置前後データの解析、カウントデータの解析など。

3. 前理事長退任挨拶

田中 勝人（一橋大学大学院経済学研究科）

2006年9月より2年間にわたり理事長を務めさせていただきました。この間、山本拓前会長、北川源四郎現会長をはじめ、理事の皆様方、および関係者各位に助けていただき、ようやく任期を終えることができました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

2007年3月には、第1回目の春季集会を東京理科大学で開催しました。かつての夏の年次大会は、2002年から統計関連学会合同の連合大会となり、会員の声として、連合大会とは別に本学会独自の大会を開いてほしいとの要望を受けたのが契機でした。1日だけの3つのプレナリー・セッションによる集会でした。参加者へのアンケートでは、講演内容および開催方式が概ね好評でしたので、同様の方式で、2008年3月に第2回目の春季集会を成城大学で開催しました。新たにポスター・セッションを設けるなどの工夫を試みましたが、第1回目よりは参加者が減る結果となりました。今後の春季集会の開催については、岩崎学新理事長

を中心にして、開催の可否を検討して、開催する場合は、集会の規模、時期や方式などについて再考していただきたいと思います。

本学会の賞についても、新たに、「研究業績賞」と「出版賞」が設けられました。しかしながら、第1回目の「出版賞」は、会員からの推薦が少なく、該当なしという結果となりました。また、第4回目となる「統計活動賞」も今回は該当なしとなりました。この点は、理事会としても、もっと積極的に関わるべきであったと反省する点ではありますが、推薦方法などを含めて、今後の活性化のために、検討する必要があると思います。

本学会の活動としては、他にも国際交流においては、韓国との2国間で行ってきた国際セッションに、新たに台湾が加わることになり、新たな展開を迎えています。統計学会の今後の活動に期待しつつ、ますますの発展を願って、退任の挨拶に代えさせていただきます。

4. 第13回統計学会賞について

4.1 日本統計学会賞

北川 源四郎（日本統計学会会長）

第13回日本統計学会賞の受賞者は

竹村 彰通氏（東京大学）

に決定いたしました。受賞者には、賞状と副賞の時計が贈呈されました。受賞理由と略歴は以下の通りです。

受賞者名：竹村 彰通 氏

略 歴：1976年東京大学経済学部卒業、1982年Stanford大学統計学科修了（Ph.D.）、1984年東京大学経済学部助教授、1997年東京大学大学院経済学研究科教授、2001年東京大学大学院情報理工学

系研究科数理情報学専攻教授、現在に至る。

受賞理由：数理統計学、特に多変量解析、統計的決定理論、分布理論、分割表解析、個表開示、ゲーム論的確率論などの分野で、多くの先端的で独創的な業績を挙げた。とりわけ高次分割表のサンプリング手法の代数的アプローチによる研究は、計算代数統計と呼ばれる新たな分野創設のきっかけの一つとなった。積極的な研究交流を通して、統計科学さらには関連数理科学分野の研究者に大きな影響を与えた。国際的学術誌への編集貢献も多大である。また、日本統計学会理事長、日本学術会議連携会員としても重責を果たし、統計学界の発展に多大な貢献があった。

主要業績：

1. On rankings generated by pairwise linear discriminant analysis of m populations, *J. Multivariate Anal.*, 61, 1-28, 1997, with H. Kamiya.
2. On the equivalence of the tube and Euler characteristic methods for the distribution of the maximum of Gaussian fields over piecewise smooth domains, *Ann. Appl. Probab.*, 12, 768-796, 2002, with S. Kuriki.
3. Some characterizations of minimal Markov basis for sampling from discrete conditional distributions. *Annal. Inst. Statist. Math.*, 56, 1-17, 2004, with S. Aoki.
4. Distribution of eigenvalues and eigenvectors of Wishart matrix when the population eigenvalues are infinitely dispersed and its application to minimax estimation of covariance matrix, *J. Multivariate Anal.*, 94, 271-299, 2005, with Y. Sheena.
5. Conditions for swappability of records in a microdata set when some marginals are fixed, *Comp. Statist.*, 22, 173-185, 2007, with H. Hara.

4.2 受賞のことば

竹村 彰通（東京大学）

この度は統計学会賞をいただき大変光栄です。まずはこれまでお世話になって来た方々に感謝の念を表したいと思います。まず私にとっての最初の先生である竹内啓先生、それから留学中のadvisorのProf.T.W. Andersonの恩を忘れることはできません。私が統計学の道に進んだのは学生時代に感じた竹内先生の魅力が大きな要因でした。竹内先生のもとで修士課程までを終え、竹内先生の推薦もあってStanford大学に留学することとなりました。そしてAnderson先生の指導を受けました。Anderson先生には大変親切にいただき、私も多変量解析の教科書の改訂のお手伝いをするなど、充実した院生時代を過ごすことができました。竹内先生とAnderson先生という二人のタイプの違う先生につくことによって、研究への取組な

どについても視野が広がったと考えています。

次に今回の受賞にあたって、栗木哲氏をはじめ多くの方に推薦の労をとっていただきました。推薦していただいた方の多くは、私と共同研究をしている方々です。私の最近の研究はほとんどが共同研究ですが、多くの共同研究において私の役割はどちらかと言うとアイデアの提供や研究方向の示唆であることが多く、論文執筆の実質的な仕事の多くを共同研究者に負っていることもあります。大学での私の教育・管理業務などの事情で、現状ではそのような役割分担になりがちです。この点について、共同研究者の方々にはご迷惑をかけていますが、お互いに議論しながら研究が進展していくことは研究者としての一番の楽しみです。年の功で、私より若い共同研究者と方々と比較しますと、私のほうが問題の見つけ方や解き方の見通しがいい場合もありますので、その点を評価していただければと思います。

最後に、東京大学経済学部での同僚、現在の所属先である計数工学科の同僚の方々には、個人的なおつきあいや統計学輪講などのセミナーの機会を通じて、多くの刺激を受けています。

さて、連合大会における統計学会賞受賞講演においては「計算代数統計の話題」という題で最近の研究の一端を紹介しました。プロジェクト研究の関係もあり、今後しばらくは計算代数統計が私の研究の中心となりますので、ここでも簡単な紹介をさせていただきたいと思います。ただし、受賞講演でも紹介しましたが、私に関心を持っているさまざまな話題は思いがけない形で互いに関連していますので、計算代数統計をきっかけとしながらもこれまでと同様により広い範囲を視野にいれながら研究を進めて行きたいと考えています。

プロジェクト研究とは、大阪大学の日比孝之教授を代表者として、私と神戸大学の高山信毅教授が主たる共同研究者としてJST（科学技術振興機構）のCREST研究領域「数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索」に採択された「現代社会とグレブナー基底の調和」のプロジェクトで

す。この制度で数学分野にもこの種の研究費が配分されるようになったことは喜ばしいことです。特に、代数学と統計学の両方にかかわるプロジェクト研究を進めることによって、日本でも純粋数学と応用数学の交流が進むことは重要です。しかしながら、わが国ではまだまだ数理科学分野の振興政策は十分ではないし、純粋数学中心のプロジェクトが提案しにくい状況にあることも問題であると思います。

上記の我々のプロジェクトに関しては、幸い計算代数統計の分野は解くべき問題（解ける問題）が豊富にある状況であり、個別の研究成果については見通しは明るいので、その点ではあまり不安はありません。しかしながら「ブレイクスルー」はなかなか出てくるものではなく、その点がやや不安です。ただし、領域名にも「探索」という語がはいっているので、チャレンジする気持ちでプロジェクトに取り組んでいけばいいのではないかと考えています。

この原稿はアメリカのNorth Carolina州にあるSAMSI (Statistical and Applied Mathematical Sciences Institute) でおこなわれたAlgebraic Methods in Systems Biology and Statisticsという1年間のプログラムのopening workshopの期間中に書いています。生物学、統計学、数学の分野から100名以上の参加者がおり、特に若い研究者が目立ちます。内容はtutorial的なものが多く、これらの分野にまたがって新しい研究を進めようという意欲が感じられます。またそれを支える人材が育成されていることが感じられます。日本でも、統計学を含めた広い意味の数理科学分野により多くの資源が投入されるよう社会への働きかけを強めるべきであると思います。特にSAMSIのようなプロジェクト型の研究所は有効であり、日本でもこのような研究所が作られるか、既存の研究所の充実によってこのような機能を実現すべきと考えます。

5. 第4回日本統計学会統計教育賞について

5.1 日本統計学会統計教育賞

北川 源一郎（日本統計学会会長）

日本統計学会統計教育賞は、統計教育の研究および実践において、顕著な業績をあげた個人または団体を顕彰するために2005年度から始められたものです。第4回受賞者は

社会調査士資格認定機構

細矢和博氏（東京大学教育学部附属中学校）

に決定いたしました。受賞者・受賞団体には、それぞれ賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と受賞者・受賞団体の略歴は以下のとおりです。

[1] 受賞団体：社会調査士資格認定機構

略 歴：社会調査士資格認定機構は、2003年に社会調査の質向上に対する社会の付託に応えることを目的として設立され、[社会調査士資格]と[専門社会調査士資格]の認定制度を確立し、社

会調査の知識と技能をもつ人材の供給を行っている団体で、実務者への研修や社会調査の重要性に関する啓発活動も行っている。

授賞理由：「社会調査士資格認定」の活動に関する下記の特徴から、日本における統計教育発展への貢献は大きく、敬意をもって高く評価することができる。

1. 資格制度を確立することで、社会における社会調査の意義を明確に示しその啓蒙活動を行った。
2. 資格認定に必要な科目の教育内容についてのミニマムリクワイアメントを示し、統計教育の標準化への方向性を示した。
3. 社会調査を取り巻く環境悪化への対策として、社会調査倫理要項を定め、国民への社会調査に関する理解および社会調査実施機関への要項理解と遵守に対する働きかけを継続して行った。
4. 資格制度を確立したことで、大学における学

生の統計学習の動機付けと促進を行い、資格取得可能大学における学生の統計学習機会の増大に寄与した。また、社会調査に関する知識・技能、相応の応用力と倫理観を身につけた人材の育成に貢献した。

これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

活動実績：社会調査士資格認定機構では、2008年6月時点で、5134名の社会調査士と1352名の専門社会調査士を輩出している。

[2] 受賞者氏名：細矢 和博 氏

略 歴：1992年東京学芸大学教育学部卒業、1994年東京学芸大学教育学研究科終了、同年学校法人相模女子大学中学部教諭、1995年東京都大田区立御園中学校教諭、1996年東京大学教育学部附属中学校・高等学校教諭 2000年東京大学教育学部附属中等教育学校教諭（学校名変更）

授賞理由：日本数学教育学会において中等教育学校の教育カリキュラムに関わる研究発表を継続的に行うなど、実験・観察・操作活動を重視した授業の開発および数学的モデル化教材の開発や中等教育学校の数学科カリキュラムに関する研究を熱心に進め、データや資料の見方・考え方を中心とした授業実践を行うための教材の開発に取り組ん

できた。この成果の一つとして、平成19年度の日本統計学会統計教育分科会主催の第4回「統計教育方法論ワークショップ」の中の教育方法事例セッション（コンペティション形式）で発表され、審査委員会では、生徒が興味を持つように工夫されたデータを用いて、生徒の気づきを促すことを目指した授業実践の内容が高く評価され、審査委員会で8件の教育方法事例報告の中で最優秀賞を獲得した。

これらの細矢氏の貢献は統計教育賞として顕彰するに相応しいものである。

主要業績：

1. 中等教育学校数学科カリキュラム開発に関する研究－数学的モデル化を重視して－（共著）、日本数学教育学会 第38回数学教育論文発表会論文集pp.55～60, 2005
2. ハンググライダーの翼の大きさを求めよう－予想に必要なデータを選ぶ力を育てる－、教育科学 数学教育 2008年2月号, 明治図書, 2008
3. 「データへの見方を深める学習指導」第4回統計教育の方法論ワークショップ, 統計数理研究所, 2008年3月。

受賞のことは会報No.138に掲載される予定です。

6. 第2回日本統計学会研究業績賞について

6.1 日本統計学会研究業績賞

北川 源四郎（日本統計学会会長）

日本統計学会研究業績賞は、統計学および関連分野において優れた研究業績をあげた研究者を顕彰するために2007年度から始められたものです。

第2回受賞者は

江口 真透氏（統計数理研究所）・John B. Copas氏（ウォーリック大学）（共同受賞）

柿沢佳秀氏（北海道大学）

に決定いたしました。受賞者には賞状と賞牌が贈呈されました。授賞理由と受賞者の略歴は以下の

とおりです。

[1] 受賞者氏名：江口 真透 氏(統計数理研究所)

略 歴：1977年大阪大学理学部数学科卒業、1979年大阪大学大学院基礎工学研究科数理系修士課程修了、1984年広島大学理学部・助手、1988年島根大学理学部・講師、1990年同助教授、1995年統計数理研究所統計基礎研究系基礎概念研究部門・助教授、1996年同応用確率論研究部門・教授、2005年同数理・推論研究系教授

受賞者氏名：John B. Copas 氏(ウォーリック大学)

略 歴：1964年インペリアル・カレッジ卒業、

1966年同大学院修了,1966年エセックス大学講師,
1969年ニューヨーク州立大学助教授等を経て
1992年からウォーリック大学教授

授賞理由：江口氏とコーパス氏は、この論文において、不完全な観測データに基づいて想定されたモデルから乖離が起こった状況での選択バイアスの問題について考察している。情報幾何学的手法を用い、分散2倍ルールによる補正を導入して漸近信頼領域を提案している。

独創的で新規性もあり、その結果の実際問題への応用性も高いと考える。実際、論文では、間接喫煙から肺がんの危険性を評価する問題を扱っている。2005年の英国王立統計協会の通常会議で発表され、この討論でも高く評価されている。

これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

主要業績：1. Local model uncertainty and incomplete data bias (with discussion), J. Royal Statistical Society, B 67(2005), 459-512(共著)。

[2] 受賞者氏名：柿沢 佳秀氏

略 歴：1993年大阪大学大学院基礎工学研究科数理系博士前期課程修了, 1996年大阪大学大学院基礎工学研究科数理系博士後期課程修了, 1996年北海道大学経済学部講師, 1998年同助教授, 2000年北海道大学大学院経済学研究科助教授, 2007年4月同准教授

授賞理由：近年の一連の多変量解析に関わる業績として、多変量正規モデルで約50年前に主要道具であった微分作用素アプローチを非正規多変量モデルの平均推測でリバイバルしたことが挙げられる。非正規母集団の場合には標本平均と標本共分散行列の分布論が困難であるが故に、標本平均と標本共分散行列の同時の関数の期待値を微分作用素から求めるアプローチを考察した。そのアプローチを多変量解析の平均推測に関わる諸統計量の局所対立仮説下での分布論へ適用し、微分作用素法が極めて有力であることを示した。これらの貢献は顕彰するに相応しいものである。

主要業績：

1. A comparison of higher-order local powers of a class of one-way MANOVA tests under general distributions, Journal of Multivariate Analysis, 99, 1128-1153, 2008, with Toshiya Iwashita.
2. Hotelling's one-sample and two-sample T^2 tests and the multivariate Behrens-Fisher problem under nonnormality, Journal of Statistical Planning and Inference, 138, 3379-3404, 2008, with Toshiya Iwashita.
3. Asymptotic expansions for the distributions of maximum and sum of quasi-independent Hotelling's T^2 statistics under nonnormality, Communications in Statistics: Theory and Methods, 37, 97-120, 2008.
4. A test of equality of mean vectors of several heteroscedastic multivariate populations, Journal of the Japan Statistical Society, 37, 253-283, 2007.
5. Multiple comparisons of several heteroscedastic multivariate populations, Statistics & Probability Letters, 78, 1328-1338, 2008.

6.2 [1] 受賞のことば

江口 真透氏（統計数理研究所）

このたびは選択バイアスのジョン・コーパスさんとの共同研究に対して第2回研究業績賞をいただき大変うれしく思っています。この共同研究を進める中で色々な面でサポートして下さった方々に対してここに深く感謝いたします。受賞の対象となった選択バイアスの問題は未だに多くの議論があります。統計理論の大部分がランダムサンプルの仮定の下で構築されたものですが、多くの場合に得られたデータに対してランダムサンプルの仮定を置くことが適当であるか確かめることが困難です。典型的にはミッシングデータが生じた場合に、この問題が生じます。ミッシングネスが無視可能であるか？ 無視可能でなければ得られたデータだけによってどのような推論が最適なのか？ この基本的な問題は現代でも良い解決は

得られてないのです。ただ私たちに可能なことは観測されていないデータに対して「もし観測されていたなら……」という反事実仮想のみです。

論文では「受動喫煙は肺がんのリスクとなるか」という問題について公表された30のスタディから下された統計的結論 (Hackshaw et al. BMJ 1997参照) を再考することから考察を始めています。これは受動喫煙に対して行政機関がどこまで関与できるかという問題にも関連したことです。このように統計学はしばしば現実の問題に最終的な判断を下す際に重要な役割を担います。ここでの統計的な問題は公表されなかったスタディは無視可能なか？ 観察されなかった交絡因子はないのか？ などのことです。統計的結論を導くために課された仮定に対して慎重な考察が必要であることの典型的な例題になっています。

ここで簡単に論文のアプローチについて紹介します。得られたデータを不完全データと見て、現実には観測されていない完全データに対して幾つかの反事実仮想を巡らします。実際のデータの最尤推定量に対して、随伴する「実際には観測されない完全データの最尤推定量」の振る舞いを同時に考えます。このとき無視可能でない場合において2つの最尤推定量の条件付分布のある関係が成立することに焦点を当てて、従来の信頼領域の補正を考えたものです。最終的な補正の形は単純です。漸近信頼領域の構成は従来の方法と全く同じで、ただ唯一の変更は漸近分散を2倍にして計算するだけです。前述の問題では受動喫煙の肺がんの相対リスク1.24と標準的な信頼区間 (1.13, 1.36) に対して区間をルート2倍に広げた (1.08, 1.41) と補正すべきことが結論されています。

この共同研究は1993年、Warwick大学に情報幾何の研究のための在外研修の際に偶然に会ったことから始まりました。双対リーマン空間の調和写像の構成について考えていたのですがそちらの方はうまく行きませんでした。そんなときにコーパスさんからKullback-Leiblerダイバージェンスのある性質について質問を受けたことがきっかけになって共同研究が始まったのでした。コーパスさん

は統計学の理論から応用まで非常に研究視野の広い人です。この本格的なイギリス統計の伝統を引き継いだ研究者から統計学の基本的な考え方から最先端の内容まで実に多くのことを教わりました。40歳を過ぎて統計学の再教育を受けたこととなります。更にコーパスさんは穏やかな人柄で2004年から自分の指導で学位を取った逸見昌之さんをポストドクトラル・フェローとして3年間の研究活動をホストしていただきました。選択バイアスの問題を考えはじめたのは局所最尤法についての共同研究が一段落した1997年ころからです。2001年に感度分析の論文を発表した後に、この論文の骨格が完成したのは2003年で翌年に投稿したことになります。JRSSの討論付き論文は研究部会で審査されます。私たちの論文も6人のレフェリーによる非常に好意的なコメントから極めて意地の悪いものまで様々なコメントに対応して出版にこぎつけました。2005年2月2日のRSSの通常部会で発表し22人の討論者の考察とその返答とともにその年の暮れにJRSSBに発表されました。

2002年7月9日付けの日記に以下の文章があります。「今日は前回訪問の3月にちょっといいかげんにやっていた近似式に対してコーパスさんから質問された。もうちょっと厳密に再考するがうまくまとまらない。頭の中を集中楕円が廻る……この妙に初等的な楕円の問題はつるつるすべる感じだ。むつかしい……」。これは上述の2つの最尤推定量の振る舞いについて苦闘していたときの文章です。この日記を書いて数日後に日本に帰る機上で解答が得られました。2つの最尤推定量は太陽系の惑星のようにパラメータの真値を中心にぐるぐる廻っていると考えたときに無視可能な場合は2つの最尤推定量は完全データと不完全データのフィsher情報行列によって定まる大小2つの楕円軌道を正しく描き、2点の延長直線上に真値があると考えられます。実際はこの秩序ある関係が無視不可能性によって崩壊して、2点の延長直線上の外に真値がはみ出すわけです。選択バイアス最悪評価は観測不能な最尤推定量の楕円軌道の上に乗せられた現実の最尤推定量が描く楕円軌

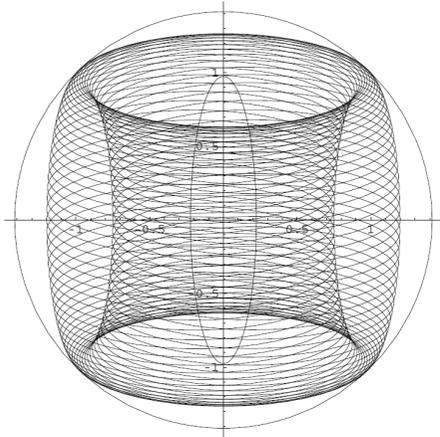


図1. 楕円集合

道の遠日点として得られました (図1 参照). 分かっただけで簡単でした. 2つの惑星が仲良く並列して太陽を廻っていたのが強い相互作用 (最悪の選択バイアス) によって, 小さい惑星が大きい惑星の衛星になるというものです. 飛行機の狭いテーブルの上で興奮して幾枚も楕円をいくつも書いていたことが今のこのように思い出されます. 今後とも精進してこの問題に対してより一歩でも真実に近づけるように努力したいと考えています.

[2] 受賞のことば

John Copas (University of Warwick, UK)

I would like to join my friend and co-author Shinto Eguchi in thanking the Japan Statistical Society for honouring us with this prize for our joint paper Copas and Eguchi (JRSSB, 2005). This is like a second honour for us, as we have already been honoured by the Royal Statistical Society when they invited us to present our paper to one of their discussion meetings in London. These discussion meetings are a long-standing statistical tradition in England --- most of the important ideas in statistics have been expounded and debated at these meetings, going right back to the founding fathers of our subject such as Fisher, Pearson and Neyman. As Professor Eguchi says, there are still many unsolved problems in our topic, but we are very

happy that our work has been acknowledged by the two statistical societies on opposite sides of the world.

Shinto is kind enough to comment on what he has learnt from me. What have I learnt from our collaboration? I think it is a deeper mathematical insight into statistical problems. Take maximum likelihood for example. I used to think of this as finding the value of the parameter which maximizes the likelihood function. Then working in applications taught me that it is really about helping people use their data to find answers to interesting questions. Now Shinto has taught me that it is about projecting data onto a model. All three views are correct, just different ways of looking at the same thing. Most of my work has been in the English statistical tradition, combining methodology with applications. This is like combining the first and second views. Now I look forward to our further collaboration, continuing to explore all three views.

I thank the JSPS for supporting our collaboration, and the ISM for hosting my visits to Japan. I have greatly enjoyed these visits, and the opportunity to explore some of the similarities and differences in statistical research between our two countries. Collaborating with Shinto has been great fun, with many stimulating discussions. The most important equipment in his office is his coffee machine, lubricating our discussions with an endless supply of the best coffee in Tokyo.

[3] 受賞のことば

柿沢 佳秀 (北海道大学)

このたびは, 第2回日本統計学会研究業績賞を授与していただき, 大変光栄に存じております.

統計学・多変量解析の基礎を東京理科大学時代に教えていただいた塩谷實先生, 大阪大学大学院時代に多くの先生方から統計関連の科目を教えていただき, 特に谷口正信先生のご指導のもとで高次の統計的推測理論について様々な視点を教えていただいたこと, そして, 研究集会や学会で多く

の方々からご支援をいただいたことに心より御礼を申し上げます。

漸近展開は、近年になって従属性のある「確率過程」へと拡張されて、適用範囲が広がってきましたが、国内の大勢の先生の貢献が顕著なテーマでもあります。1950年代から1970年代に正規多変量線形回帰モデルにおける係数行列の線形仮説や分散行列の構造に関する検定統計量の漸近展開が蓄積され、1970年代から1980年代に推定・検定の高次漸近的有効性の多くの成果がえられており、それらの文献を通じて多くのことを学びました。Efron (1978) のbootstrap法の精度を保証する役割が漸近展開にあったことも興味深い事実でした。このような主な数理統計学の変遷の後、1990年代に1つのキーワード「非正規・非線形」があり、国内の研究者を中心に多変量母集団の平均推測に関わる諸統計量の帰無分布の漸近展開が非正規へとリバイバルされ、今は「高次元多変量解析」の課題へシフトしている現状であると思います。

私どもが「次元数固定、標本数無限大の枠組み」で多変量母集団の平均推測の漸近展開に取り組んだことは多少時代遅れに感じる部分もありますが、この数年間はこの古典的問題の非正規版を研究の対象としてきました。この研究は、岩下登志也氏との共同研究の形で1標本・2標本問題からはじまり、その q 標本への拡張、すなわち、分散不均一な多変量1元配置における平均ベクトルの同等性検定の局所検出力比較までを共同研究とし、その後は、平均ベクトルに関する対照比較・対比較の同時信頼区間に必要となる諸統計量を扱い、

成長曲線モデルの一般化線形仮説のある検定クラスの局所検出力比較へも進展しています。

一連の研究の特徴は、一貫して「微分作用素法」を採用したことにあります。この方法は1956年の塩谷先生、伊藤先生によるLH統計量の臨界点の近似、1963年の判別関数に対する丘本先生の漸近展開の導出などから1つの有力な道具として知られていたのですが、それを非正規にリバイバルしました。楕円分布の場合の岩下氏の1996年統計学会の報告を私が聞き、以後、非正規に拡張する共同研究をはじめたことがきっかけでした。1998年統計学会と1999年日本数学会でそれらの第1弾を報告させていただいたのですが、当時は微分作用素の適用に際して非効率な箇所があり、それを再考察したのは2004年でした。JSPI特集号にあわせて原稿を準備し、それら改訂版がJSPIとJMVAに採択され、その同時進行として、対照比較・対比較の同時信頼区間に必要となる最大値・和の統計量、及び、分散不均一な設定で平均ベクトルの同等性検定に対しても微分作用素公式を適用しました。さらに、多変量線形回帰モデルの係数行列の線形仮説の検定に付随する公式も整備し、それが成長曲線モデルの一般化線形仮説でも応用されることが分かりました。

この数年間は多変量解析の古典的問題を中心に研究して参りましたが、これからはばらくは私の関心ある対象の1つである時系列解析分野を中心に試行錯誤したいと思っております。どうぞ今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

7. 第22回日本統計学会小川研究奨励賞について

7.1 日本統計学会小川研究奨励賞

受賞者氏名：黒住 英司（一橋大学）

受賞論文：The Wald-Type Test of a Normalization of Cointegrating Vectors, *Journal of the Japan Statistical Society*, Vol.37, No.2, 2007, 191-205.

受賞論文と黒住氏について

山本 拓（日本大学）

受賞対象となった共和分モデルは、非定常な経済データの時系列分析において標準的に用いられるモデルである。共和分という概念に馴染みのな

い読者も多いと思われるので、まずそれについて説明する。なおここで、非定常なデータとは、個々の時系列データの構造をAR (autoregressive) モデルで表現した時に、単位根がその固有値に含まれるようなデータのことである。

経済データ分析の中心は変数間の関係を探ることであり、時系列分析においては主にVAR (vector autoregressive) モデルを利用するが、複数の非定常な時系列データに対して単にVARモデルを想定しただけでは、各変数はバラバラに発散してしまうことを含意する。しかし、関連性のある複数の経済データはバラバラに発散したりはしない。例えば、異なった満期の利率率などはバラバラに発散したりしない。そこでGranger (1983) は、各変数は非定常であるが、その線形結合は定常になるという、VARモデルにある種の制約を課す共和分 (cointegration) という概念を提案した。このような定常性をもたらす制約のベクトルを共和分ベクトルという。この共和分という概念は、経済変数間の長期の均衡を近似するものと見なされ、現在では非定常な経済データの分析において極めて重要な役割を演じている。

しかしながら問題も残されてきた。共和分ベクトルは、通常最尤法により推定されるが、必ずしも一意に識別できないという問題点がある。そこでその構造を特定するには何らかの基準化を行う必要があり、さらにその基準化が正しいか否かについて検定を行う必要がある。本論文は、共和分ベクトルの一般的な基準化についてのWald型の仮説検定の新しい方法を提案している。さらに従来の尤度比型の検定よりも、小標本における検出力が高いことが実験により示されている。経済データの分析においては、経済学的に意味のある共和分ベクトルの構造を得ることが肝要であり、本論文の結果はそういう方向での重要な貢献である。

黒住氏は、1995年に一橋大学経済学研究科修士課程に入学し、2000年春に博士号を取得し、2000年秋より一橋大学経済学研究科に職を得て、現在に至っている。同氏は大学院在学中、私のゼミに

所属し時系列分析を主に学んだが、当初よりサブゼミとして田中勝人氏のゼミにも参加し、厳密な漸近理論についての薫陶を受けたことも附言したい。

黒住氏の研究分野は、当初は、博士論文で取りあげた、いわゆるMA単位根の検定問題 (すなわち、定常性を帰無仮説とし、非定常性を対立仮説とする検定問題) を種々のモデルに適用するという研究が主であった。次には、構造変化を考慮に入れた単位根の検定、あるいは非定常なデータにおける構造変化の検出、に関心が注がれた。

その後は、非定常データの様々なトピックに積極的に取りくんできており、数多くの重要な研究成果を一流誌に発表してきている。今回の受章対象論文もその中のひとつである。最近では、非定常な動学的パネル分析にも関心を広げている。一つの指標にすぎないが、最近発表された計量経済学者のランキングでは、2000-2005の公刊論文に関して、黒住氏は世界で20位にランクされており (Econometric Theory (2007), P.996, Table 15a), その活発な研究活動はすでに世界的に認知されていると思われる。今回の受賞を励みに一層の活躍を期待したい。

7.2 受賞のことは

黒住 英司 (一橋大学)

このたび、小川研究奨励賞という荣誉ある賞をいただき、たいへん光栄に思っております。私のような者がこのような素晴らしい賞をいただくのは、正直、身に余る思いであり、また、若手研究者が多い中、私のようなすでに「若手」とは言い難くなりつつある者がこの賞をいただくことに、大変恐縮しております。

私が学者としての道のりを何とか歩み始めることができたのは、ひとえに素晴らしい指導者の方々に恵まれたからだと、今更ながら痛感しております。大学院時代の指導教官である山本拓先生ならびに田中勝人先生には、時にはマン・ツー・マンでご指導いただいた時もあり、心より感謝し

ております。また、一橋大学および東京大学の多くの先生方にも懇切丁寧なご指導を賜ることができたのは、非常に幸運だったとしか言いようがありません。一方、学者を目指す以前、電力中央研究所勤務時代には、服部恒明氏・門田治氏から経済の実証分析のノウハウを伝授いただいたおかげで、時系列分析・計量経済学の理論を研究する今日でも、その背後にある実態経済のことを常に意識し続けることができております。

私は修士課程当初は経済の実証分析を最終目的として、そのための手法である計量経済学や時系列分析の理論を学びましたが、いつの間にかそれら理論の虜となり、以来、経済時系列の単位根・定常性の問題や、共和分、季節性、構造変化などに関する理論的な問題を研究テーマとしてきました。これらのテーマは一見、異なるもののように思われることもありますが、非常に密接に関係している問題であります。たとえば、単位根問題に季節性や周期性を考慮した季節単位根や周期的単位根問題というものまでこれまで様々な雑誌で取り上げられており、私が博士論文で取り扱ったテーマの一つでもあります。また、季節単位根が存在する場合には、季節共和分の可能性も視野にいれる必要があります。一方、構造変化の有無は単位根検定の結果に大きな影響を与えることが広く知られており、両者の関連性や構造変化の可能性がある時の対処法などの議論が15年以上、続いております。

私は以上のような問題に大学院時代から関心を持ってまいりましたが、今回受賞対象となりました論文は、共和分に関連したテーマを扱っていま

す。共和分行列の推定については、最尤法が広く用いられておりますが、その最尤推定量は、共和分行列の列ベクトルが張る空間までしか識別されないことが知られております。しかしながら、実際のデータを用いて共和分行列を推定する場合、経済学的見地から意味のある識別条件を満たした、標準化された推定値が必要となってきます。この場合、共和分行列の最尤推定値を分析者の恣意的な識別条件で標準化することになるのですが、そのような標準化が果して妥当であるかどうかは、統計学的に検証しなければなりません。今回の受賞対象論文では、そのような問題意識のもと、共和分行列の識別性に関するワルド検定統計量を導出し、その漸近特性ならびに有限標本特性の分析を行いました。また、実証例も付加することにより、共和分分析における理論・応用両面できくばくかの貢献ができたものであると思っております。

今回の小川研究奨励賞の受賞は大変栄誉で喜ばしいことではありますが、一方、「研究奨励」という言葉が示すように、今回の受賞には今後の研究成果への期待が込められたものであることは言うまでもございません。決して今回の受賞に甘んぜず、今後さらなる精進を重ね、より一層洗練された研究成果を求めて切磋琢磨してまいる所存でございますので、今後とも皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

略歴：昭和44年生東京都生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。一橋大学大学院経済学研究科准教授。

8. 会員からの投稿記事

第3回Biostatisticsネットワーク参観の記

柳川 堯（久留米大学バイオ統計センター）

2008年8月7日と8日、京都大学医学部において第3回Biostatisticsネットワーク（通称BSネット）が開催され、参観の機会を得たので、統計学

会会員諸氏にその様子を紹介したい。第3回BSネットは、京都大大学院医学研究科社会健康医学系専攻医療統計学、北里大大学院薬学研究科薬学専攻臨床統計学コース、久留米大大学院医学研究科バイオ統計学群、東大大学院医学研究科健康科学・看護学専攻疫学・生物統計学、東京理科大学

学院工学研究科経営工学専攻医薬統計学の各大学院においてBiostatisticsを専攻する大学院生の主催によって開催され、各大学院から修士課程・博士課程の学生が約80名参加した。所属する学部や名称は多様である。学習や研究していることも多様である。しかし、Biostatisticsという共通の傘の下で集うことが出来る。ネットワークを構築し横の連携を深めることで、学習や研究を進展させてBiostatisticsという新興分野を日本に根付かせたいというのが主催者を代表して挨拶した野間久史君（京都大DC3年）の弁であった。いつの間に、Biostatisticsを専攻する大学院生が80余名にもなったのか、しかも以下に述べるような充実した発表が続き大変勇気つけられ、目を見張るとともにとても感慨深い参観であった。発表は、上に述べた5つの拠点大学院から2人づつ合計10人の代表が次のような標題について熱弁した。「原発不明がンのマイクロアレイによる分類（倉橋一成）」、「カーネルロジスティック回帰の変数選択（姜英）」、「一般化推定方程式法における作業相関構造選択基準に関する研究（五所正彦）」、「Cancer outlier differential gene expression detection via block mixture model（大浦智紀）」、「主要変数が2値の場合のランダム化比較試験における共凶変数調整

の検討（大澤菜由）」、「Cumulative incidenceによるcompeting riskの解析（坂巻顕太郎）」、「抗がん剤市販後調査に基づく脱落を考慮した解析法の研究（高田亜実）」、「生存時間解析におけるt時間生存者の予測性能評価（小関雅裕）」、「2剤2期クロスオーバー試験の計画段階におけるwash-out期間の設定方法に関する研究（佐藤宏征）」、「Exact methods for comparing two diagnostic tests with multiple readers based on categorical measurements（室谷健太）」、「経験ベイズ法における事前分布のモデル評価基準（野間久史）」。発表に対する質疑応答は、まず大学院生間で話題を理解するレベルから高度の研究レベルまでにわたって行われ、その後でやっと参観者たちに許されるという形式で大変活発に行われた。佐藤宏征君（東京理科大）と室谷健太君（久留米大）の二人が最高発表賞に輝いた。また、大橋靖雄東大教授の特別講演と、息がぴったり合った寸芸入りの佐藤俊哉・恵子教授ご夫妻による特別講演も行われ、さらに懇親会も開催され、大学院間の交流が活発に行われとても有意義であった。第3回BSネットの開催に対して藤原記念財団特別奨励金の支援があったと聞いている。大学院生を代弁して厚くお御礼申し上げたい。

9. 2008年度統計関連学会連合大会報告

9.1 プログラム委員会報告

清水 邦夫（慶應義塾大学理工学部）

[1] 概況・総括

大会は、予定通り、2008年9月7日（日）から10日（水）まで慶應義塾大学理工学部矢上キャンパスにおいて開催されました。7日に市民講演会およびチュートリアルセッション、8日から10日まで企画セッション・コンペティションセッションを含む学術講演およびソフトウェアセッションが行われました。

大会期間中、幸いにして晴天に恵まれましたが、7日の夕方には強い雷雨があり、一時停電し、帰

宅・帰ホテルの足が奪われました。また、9日朝には東横線の遅延により、セッションの開始を20分遅らせるというハプニングがありましたが、全体としては市民講演会約210名、チュートリアルセッション約200名（会場内）、招待講演者を含めて約820名の大会参加者数を得て、概ね順調に大会を終了することができました。大会の成功は、偏に講演者・オーガナイザー・座長および参加者諸氏のご協力の賜物と感謝する次第です。

さて、以下に、Webによる講演その他の申し込み受付、市民講演会、チュートリアルセッション、コンペティションセッション、統計分析・データ・教育ソフトウェアセッションの各担当責任者

により、それぞれの担当についての報告をしても
らいましたので、ご覧下さい。本報告が今後の大
会企画に少しでも参考になれば幸いです。連合大
会の益々の発展を願っております。

(プログラム委員会委員長 清水邦夫 慶應義塾
大学理工学部)

[2] Webによる講演その他の申し込み受付

大会では、企画セッション53件、コンペティ
ション21件、一般159件の合計233件の学術講演(+
企画セッション日本統計学会各賞受賞者講演)が
行われました。申し込みにつきましては、一般講
演や参加の事前申込み、報告集原稿提出は基本的
にホームページ上で行いましたが、締め切り直前
にWebシステムが不安定になるなど申し込みされ
た会員の皆様にはご迷惑をおかけしました。また、
今回、講演申込時のキーワードについて、該当す
るキーワードがない場合には「その他」の欄を作
成し、申込者に記入していただく形式をとしまし
ましたが、この点はプログラムの編成に参考になっ
たと思われます。

(担当責任者 瀬尾隆 東京理科大学理工学部)

[3] 市民講演会

統計関連学会における研究・教育活動内容の普
及啓発を目的として、例年通り青少年や一般社会
人を対象とした市民講演会が、9月7日(日)
12:30~17:30にかけて、慶應義塾大学矢上キャン
パスマルチメディアルームにおいて開催され
た。とくに今回は、「情報社会と統計教育~私た
ちの暮らしを支える身近な統計」をテーマに、3
件の講演会および6件の展示・体験ブースが設置
され、市民、高校生、教育委員会、教師など学校
関係者および統計関連学会会員など約210名の参
加者が熱心に講演に聞き入り、また各講演の前後
には、展示された教材を見て回るなど盛会であっ
た。

講演会は、司会進行:清水邦夫(慶應義塾大学)
により、以下のセッションで構成された。

第1セッション

座長:田栗正章(大学入試センター副所長)

「私たちの暮らしと統計-統計は国民の共有財
産-」 川崎 茂(総務省統計局長)

第2セッション

座長:澤田利夫(東京理科大学数学教育研究所長)

「指学習指導要領で重視された統計活用能力-
算数・数学科での今回の改訂の考え方-」

長尾 篤志(文部科学省初等中等教育局教育課
課程教科調査官)

第3セッション

座長:清水邦夫(慶應義塾大学)

「統計家が考えるリテラシー『豊かに生きるた
めの智』プロジェクトの議論より-」

吉村 功(東京理科大学教授)

閉会挨拶:北川源二郎(統計数理研究所長)

また、講演会場に併設された以下の6件の展
示・体験ブースでは、それぞれ特徴的な統計教育
教材・資料が展示・配布された。

1. ようこそ、統計の世界へ(総務省統計局、
同政策統括官(統計基準担当))
2. BB弾によるサンプリング実験、トースタ
ー&スタツ(統計数理研究所)
3. シミュレーション統計グラフ体験:マルチ
メディア統計百科事典(日本統計協会)
4. 統計グラフコンクール優秀ポスターの紹介
(全国統計協会連合会)
5. 使ってみよう国勢調査G-Censusシステム
(統計情報研究開発センター)
6. 海外での統計教育事情~センサス@スク
ールの紹介(日本統計学会統計教育委員会、統
計教育分科会)

今回の市民講演会は、平成20年度文部科学省科
学研究費(研究成果公開促進費)補助事業に採択
され、主催:日本統計学会、共催:統計関連学会
連合・数学教育学会・統計数理研究所・全国統
計教育研究協議会・(財)日本統計協会・(財)全
国統計協会連合会・(財)統計情報研究開発セン
ター・東京理科大学数学教育研究所、後援:総務
省・日本数学教育学会・横浜市として開催され
た。この

助成金と大会運営費により、HPの開設に加え、カラーチラシ、ポスター、パンフレットなどが制作でき、共催いただいた諸団体を通じて全国の教育関係者に市民講演会の広報を介して統計教育の今日的意義を伝えることができた。

(担当責任者 渡辺美智子 東洋大学経済学部)

[4] チュートリアルセッション

今年度のチュートリアルセミナーの開催に当たって、昨年度と同様に、学会員からテーマを募ることとなった。その結果、1件のテーマの提案があったが、講師担当の候補となった先生のご多忙と、私ども担当委員の力不足のため、提案されたテーマのセミナーは実現できなかった。そこで、担当委員が、注目すべき2つの分野「1. メタアナリシス」と「2. 構造方程式モデリング」を選定して、1のテーマは折笠が、2のテーマは足立がオーガナイザーとなり、それぞれ、手良向聡氏(京都大学)、および、豊田秀樹氏(早稲田大学)に、具体的なテーマ名と内容の決定を含めて講師をお願いしたところ、快諾を得てチュートリアルセミナーが実現した。なお、テーマ2については、豊田氏を含めて計4名でのリレー方式をとることとなった。決定したテーマ名と、文責の足立が要約した概要は次のとおりである。

[テーマ1] メタアナリシスの方法と実践

講師：手良向 聡 (京都大学)

医学分野におけるメタアナリシスの方法と実践に焦点をあて、主にランダム化対照臨床試験のメタアナリシスに関する標準的なデータ解析手法および留意点について事例を交えて解説がなされた。

[テーマ2] 構造方程式モデリング

－ 3次までの積率構造の理論と応用－

講師：豊田 秀樹・岩間 徳兼・竹下 恵・久保 沙織 (早稲田大学)

構造方程式モデリングの3次までの積率構造の理論とその適用法が論じられ、この方法によって、殆ど、どんな分布でも漸近的に有効な推定量が構成でき、識別性・同値モデルの問題を回避して適

合度によるモデル間比較ができることが解説された。

9月7日のセミナー当日の聴講者は、足立が数えたところ、最大時に197名に達して、会場の教室は満員に近くなる盛況ぶりであった。ご聴講いただいた皆様方に感謝申し上げたい。2008年夏の特徴ともいえる雷雨がセミナー途中より降り出して、終了間際には、近くでの落雷を感じるほどの空襲の如き激しい雷が停電を心配させたが、瞬間的停電が起きたのはセミナー終了後であり、難なきをえた。おかげで、セミナーでの最新の話題が、雷の迫力のごとく、充実したものであることが実感できた。(担当：足立浩平 大阪大学、折笠秀樹 富山大学、宮田 敏 癌研究会ゲノムセンター)

[5] コンペティションセッション

統計関連学会連合大会のコンペティション講演は今年で6回目であります。対象者は、平成20年4月1日時点で満30歳未満のいわゆる若手研究者(大学院生、教員、社会人等を問わない)です。大会における連名講演の場合は、コンペティション対象者は実際に口頭発表した方としました。

コンペティション講演を申し込まれた方皆さんに大会当日に講演していただきました。審査方法は、昨年はセッション参加者による一般審査のみでしたが、今年は、当日の口頭発表に対しての数名の審査員による特別審査と参加者の一般審査との総合評価で行いました。

大会における審査方法については、数名の審査員の記名投票とコンペティションセッションの参加者の記名投票に基づき、プログラム委員会で選考することにしました。特別審査および一般審査での評価は、共に、A、B、Cの3段階評価(A：受賞に値する、B：受賞としてもよい、C：受賞に値しない)を用いました。なお、講演者ならびに共著者は自身への投票は出来ないことにしました。

評価は、研究内容のみならず、発表者各自が工夫をして、うまく内容を伝えられたか、質問的

確に答えられたかという発表の仕方も含め、全体としての素晴らしいプレゼンテーションになっているかを評価の対象としました。

コンペティションセッションは9月8日(月)の午前、午後(1)、午後(2)、そして9月9日(火)の午前と同じ会場(B会場)で行われました。講演数は21件でした。特別審査と一般審査のそれぞれに対して、Aを2ポイント、Bを1ポイント、Cを0ポイントとし、講演者毎に有効投票数で平均点を算出し、総合評価をしました。選考は、これらの点数に基づき、プログラム委員会で行いました。最優秀報告賞は1名、優秀報告賞は3名を予定していたのですが、プログラム委員会で検討しまして、今年度に限って最優秀報告賞は1名、優秀報告賞は4名に授与することにしました。2008年度統計関連学会連合大会の最優秀報告賞は、山本紘司さんに、優秀報告賞は、川野秀一さん、白石友一さん、松井秀俊さん、そして、三浦翔さんに決定いたしました(五十音順)。大会中、懇親会場において懇親会の直前の表彰式にて受賞者を発表して表彰し、それぞれ賞状と副賞が贈呈されました。

コンペティション講演をされました皆さんが、研究内容や発表の仕方等、素晴らしいプレゼンテーションでありました。昨年のコンペティション報告にも書きましたが、連合大会のような大変権威ある大きな学会でコンペティション講演することは、受賞する、しないにかかわらず、若手の皆さんにとって大変に有益であり、今後の研究活動への大きな励みになると思います。若手によるコンペティション講演は、毎年、大変多くの方が関心を持って注目しております。多くの方に自分(自分の研究と自分自身)を知ってもらい、又とない絶好のチャンスであります。

権威あるジャーナルへ論文を掲載することは重要なことではありますが、それとともに、若手の皆さんにとって、多くの方から一躍注目される立派なコンペティション発表をすることも大変に重要なことでもあります。今回コンペティション講演をされました方の中から、将来世界のトップクラス

の統計研究者が誕生するものと確信しております。これからも若手の皆さんには、是非コンペティション講演を考えていただきたいと思います。

最後に、コンペティション講演を申し込まれました若手研究者の皆様、座長の先生方、審査に参加されました皆様、そして、コンペティション講演に関する準備等いろいろとご尽力いただきました大会運営関係者の方々へ心よりお礼申し上げます。

(担当責任者富澤貞男 東京理科大学理工学部)

*「受賞者のことば」は別欄に掲載されています。

[6] 統計分析・データ・教育ソフトウェアセッション

2008年度統計関連学会連合大会のセッションの一つとして、「統計分析・データ・教育ソフトウェアセッション」(座長：岡山大環境・飯塚誠也、実践女子人間社会・竹内光悦、オーガナイザー：岡山大環境・飯塚誠也、実践女子人間社会・竹内光悦、関西大経済・橋本紀子)が、2008年9月8日(月)13:30~15:30に慶應大学矢上キャンパス12棟109番教室(C会場)において行われました。

統計分析・データ・教育ソフトウェアに関する多くの関連企業や研究機関のご協力があり、合計9件の講演となりました。プログラムは次の通りです。

1. 国内最大規模の総合経済データベース・サービスNEEDSのご紹介

日本経済新聞デジタルメディアNEEDSカンパニー

2. MATLAB (R) でNAG統計アルゴリズムを利用する

千葉 弘 (日本ニューメリカルアルゴリズムズグループ (株))

3. JMP 7のダイナミックなデータフィルタリング-森を見て木も見るデータ分析-

増川 直裕 (SAS Institute Japan (株) JMPジャパン事業部テクニカルグループ)

4. 統計解析ソフトS-PLUSによる様々なグラフ作成例の実演

田澤 司 ((株) 数理システム)

5. データマイニングソフトウェアVisual Mining Studio機能ご紹介－化合物構造式データの分析例－

中園 美香 ((株) 数理システム)

6. JUSE-StatWorks/V4.0によるデータの特徴把握とモデリング

日本科学技術研修所 数理事業部

7. Minitabを用いたQualityチェックと改善の為に統計分析手法について

行武 晋一((株)構造計画研究所創造工学部)

8. 教育現場への統計GISソフトの普及：「使ってみよう国勢調査データ (G-Census)」の開発と頒布

小西 純 ((財)統計情報研究開発センター)

中村 華津子((財)統計情報研究開発センター)

9. 統計教育支援のためのInternational CensusAtSchoolプロジェクトの紹介と日本語化への対応

深澤 弘美 (東京医療保健大)

本セッションにおきましては、最新のデータや統計ソフトウェア、教育ソフトウェアに関する様々な内容の講演で非常に有意義なセッションとなりました。この場を借りまして、ご講演いただいた企業および研究者の方々に感謝申し上げます。

(担当責任者：飯塚誠也 岡山大学大学院環境学
研究科)

9.2 運営委員会報告

石岡 恒憲 (大学入試センター)

2008年度の大会は、統計関連学会連合大会として7回目の開催となりました。昨年度より5学会の共催となり、ますます盛況となりつつあります。参加者数も招待講演者を含めて約820名を記録し、3年連続で800名を超える、統計関連分野におけ

る国内最大の大会としての位置付けが定着したのではないかと考えます。

運営委員会の仕事は大きく3つの業務－(1)受付業務を含む会計、(2)報告集およびCD-ROMの作成、(3)広告の受付等の業務－になっております。それらについてご報告申し上げます。

今年度は事前参加申込をより促進させるために、事前申込における参加費を値下げしました。また事前参加申込期間も大会開始の約半月前まで確保し、不参加の場合でも冊子を郵送するなど、事前参加申込をしやすくするための配慮をしました。事前参加申込は参加者の皆様へのスムーズな対応が可能になるばかりでなく、運営委員会としましても当日のお金の管理が簡便になり、人件費などを抑えることができます。来年度には、より多くの参加者の方の事前参加申込をお願い致します。チュートリアルにつきましては、領収書の日付が間違っており、参加者の皆様にご迷惑をおかけしました。心よりお詫び申し上げます。

報告集では、今年度、参加者の利便性を図るために、著者索引を復活させました。またCD-ROMについては、従来かさばっていたプラスチックケースをやめ、不織布ケースを採用しました。運営委員会より投稿者の皆様へのお願いであります。投稿に際しましては、プログラム委員会より指定された様式で全員の方が原稿をお出しいただきたくことを切に希望いたします。フォントの埋め込みがなされていないために文字化けに関する処理に多くの手間を要しております。Webサイトには昨年度よりそのための方法を記した記事へのリンクも張っております。何卒、投稿者の皆様におけるご理解とご協力をお願いいたします。

広告に関しまして、本年度も大会ホームページ上のバナー広告をはじめ、多種多様の広告を募集致しました。おかげさまで多くの関連企業や研究機関のご協力を得ることができました。心より感謝申し上げます。参加費を少しでも抑えるためにも、安定した広告収入が必要であり、今後とも関連企業の皆様のご助成を何卒お願い申し上げます。

9.3 コンペティション 受賞のことは

[1] 最優秀報告賞

山本 紘司 (東京理科大学大学院理工学研究科)

このたび統計関連学会連合大会コンペティション講演におきまして、榮譽ある最優秀報告賞をいただくことができ、大変光栄に思っております。コンペティション講演を企画・運営して下さった方々、ならびにコンペティション講演を審査して下さった皆様に厚く御礼申し上げます。また、日頃よりご指導くださいました先生方に心から感謝申し上げます。

本発表では、正方分割表解析において、対称性に関する累積確率に基づいた新しいモデルを提案しました。さらに、提案したモデルに関する分解定理を与えました。この分解定理は実データの解析において、より詳細な解析をするのに有用であることを示しました。分割表データ解析は、医学・生物学・社会学・心理学等多くの分野で用いられており、今後も分割表解析の研究は非常に有益であると考えております。

プレゼンテーションに関しては、多くの方々にわかりやすい発表をすることを心がけました。そのため、理論的結果の説明には数式をあまり用いず、図によって視覚的・直観的に理解していただけるよう工夫しました。また、一般講演とは違ったコンペティション講演独特の緊張感を経験できたことも貴重な経験であり、今後の私の研究活動の糧になると思っております。

最後になりますが、今回の受賞を励みにより一層の努力を重ね、微力ながら今後の統計関連学会連合ならびに統計学の発展に貢献できるよう精進していく所存ですので、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

[2] 優秀報告賞

川野 秀一 (九州大学大学院数理学府)

このたびは、統計関連学会連合大会コンペティション講演において優秀報告賞をいただき、大変光栄に思います。まず、このような素晴らしいコ

ンペティション講演を企画・運営して下さった先生方、ならびに座長の先生方、そして審査に参加していただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。また、常日頃よりご指導いただいております小西貞則先生、共に学びあい支え合っている研究室の仲間、そしてお世話になっているすべての関係者の方々に感謝いたします。

本報告では、群の所属が既知のデータと未知のデータが混在する状況において、両種のデータを効果的に用いて判別モデルを構成する半教師あり学習法について発表いたしました。この学習法は近年、機械学習の分野で大きな注目を集めており、生命科学をはじめとしたさまざまな分野で応用されつつあります。私は、この学習法に対するモデルの非線形化及び安定化を図り、新たな半教師あり非線形判別方式を提案しました。また、いくつかの数値例を通して提案手法の有効性について検証いたしました。

コンペティション講演では、研究発表のプレゼンテーションが重視されます。そこで、本講演に臨むにあたり、聞いていただくすべての方々にとってわかりやすいスライドを作成することはもちろんのこと、発表を行う際の声の強弱などにも注意しました。自分の発表を聞いたらどう感じるか、「本当にこの発表は興味深いか?」、「わかり難い発表にはなっていないか?」ということを中心に考え、発表資料の推敲を入念に行い、よりよいプレゼンテーションを行うことに努めました。その結果、当日行ったプレゼンテーションは、今まで行ってきたプレゼンテーションの中で一番納得のいくものであったと感じております。

まだまだ未熟者の私ではありますが、今後もこの賞を糧とし、一層の努力を重ね、日々の研究に邁進していきたいと思っております。これからどうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

[3] 優秀報告賞

白石 友一 (理化学研究所)

このたび優秀報告賞を頂き大変光栄に思っております。コンペティション講演を運営して下さっ

た方々、講演を聴いてくださった皆様、統計数理研究所での博士課程時代にご指導くださった福水健次先生、研究について何度もディスカッションの機会をくださった名古屋大学の金森敬文先生、快く自分を本学会へ送り出してくださいました理化学研究所の畠山真里子先生に、この場を借りて感謝いたします。

今回の報告では「Game-theoretical generalization」というタイトルで、ゲーム理論に基づいた新しい判別機の組み合わせ法についての発表をさせていただきました。今回の提案手法は、不確実性を考慮して、ミニマックスとなる組み合わせ法を数理計画法によって求めるものです。手法の実用性のみならず、ゲーム理論でのキーワードである「ミニマックス定理」や「エントロピー」といった概念との対応関係がうまく付いていることが、本手法の特徴だと思っております。プレゼンテーションではそうした理論的な面白さを伝えようと心掛けました。

現在は、理化学研究所でシステム生物学と呼ばれる分野の研究に携わっております。回りは生物を専門とし統計をアプリケーションとして見做している方々が主なので、そうした方々との過ごしていると今までとは違った視点で統計学を見れる機会に恵まれます。そして、実際のデータ解析をするために、まだまだ自分の能力が不十分であるということを感じさせられます。今後、様々な分野の人との触れ合い、数々の体験を通じて、「学問の一分野として統計学がすべきこと、その中で自分が貢献したいこと、できること」を常に考えつつ、実際データを解析する人の立場に立った統計的手法や理論を作ることができる研究者を目指して、日々精進していきたいと思っております。

[4] 優秀報告賞

松井 秀俊（九州大学大学院数理学府）

この度は、統計関連学会連合大会コンペティション講演におきまして、優秀報告賞という荣誉ある賞を頂き、身に余る光栄で、驚きと共に大変嬉しく思っております。コンペティションを企画・

運営してくださいました方々、そして貴重なコメント、質問をくださいました皆様に厚くお礼申し上げます。

本報告では、離散時点観測データを滑らかな関数データとして扱った説明変数と、スカラー目的変数との関係をモデル化する関数回帰モデルに対して、SCADとよばれる制約を用いた正則化法を適用することにより、モデル推定と関数データの変数選択を同時に行う方法を提案しました。LassoやSCADといった制約に基づく推定は、一部のパラメータを0に縮小する性質をもつことから変数選択に用いることができ、その性質から今後ますます注目を浴びるようになるものと考えています。さらに、関数回帰モデルに対して縮小推定を適用するために、一つの変数に伴う複数のパラメータをグループ化して扱う方法を適用しました。この内容を15分という限られた時間で要点を絞って、かつ分かり易く聴衆の方々に伝えるためのスライド、プレゼンテーションを準備することは容易ではありませんでしたが、「この説明で本当に人に理解されるか」と客観的に自分のプレゼンを捉えるよう試みるなど、工夫に多くの時間を費やしました。

連合大会での講演は今回が4回目で、初めてコンペティションで講演をさせていただきました。思えば3年前のこの大会が初の学会発表の場であり、当時はガチガチに緊張していた記憶がありますが、今回はその時とはまた異なった緊張感がありました。その中で、多くの方々に講演を聞いて頂いたと同時に、多くの若手研究者の一人として私を評価して頂いたことは、非常に貴重な経験、そして大きな自信となりました。私の研究が、今後の統計学の発展に少しでも貢献できれば幸いですと感じています。

最後になりましたが、私をここまでご指導くださいました小西貞則先生、そして共に切磋琢磨してきた研究室の仲間達に深く感謝致します。今回頂いた賞を励みに、今後より一層精進して参りたいと考えております。

[5] 優秀報告賞

三浦 翔（総合研究大学院大学複合科学研究科）

このたびは、統計関連学会連合大会優秀報告賞をいただきまして、大変光栄に思います。日ごろから研究指導をしていただいております江口真透先生、山下智志先生に深く感謝いたします。また、コンペティションの企画・運営に携われた方々や審査して下さった方々に、このような発表の場を設けていただきましたことを感謝いたします。

今回の報告は、「信用リスクスコアリングにおけるAUC最大化」というタイトルで、AUCを用いた新たなデフォルト確率モデル作成の手法を提案いたしました。現在、デフォルト確率モデルにおいては、ロジットモデルを仮定したもとで最尤推定法によりモデルを作成し、モデルの評価としてAUCを用いる方法が広く用いられています。しかし、一般的にはこのモデルはAUCに関する最適性は有しません。そこで、AUCを目的関数として用いることによって、AUCに関して最適なモデルを作成することが本研究のモチベーショ

ンとなっています。

今後の課題としては、債権回収率のモデルを構築することを考えています。信用リスクはデフォルト確率のほかに債権回収率などの要素から構成されていますが、回収率のモデルは確率過程モデルを用いた研究が多く行われているものの、データを用いた統計モデルの研究はほとんどなされていないのが現状です。これは、統計解析に必要なデータが不足していることや、従来の統計モデルでは表現できないようなデータであることが理由です。モデル作成に必要なデータベースの構築と、回収率に特化した新たな統計モデルを考えることがこれからの課題となります。

いまだ発展途上にある信用リスクという分野で発展に寄与できる喜びを感じております。研究を楽しむこと、研究の機会を与えてくださっている方々、支えてくださっている方々への感謝の気持ちを忘れず、今まで以上に日々の研究に励んでいきたいと思っております。

10. 会長候補者推薦のお願い

北川 源二郎（日本統計学会会長）

本年秋には次期会長（2009・2010年）の選挙が行われます。本学会では、会長候補者を会員から推薦していただくことになっております。この趣旨は、一般の会員の参加意識を高めることにあります。多くの会員の皆様から推薦をいただけることが前提ですので、積極的にご推薦くださるよう、宜しくお願いいたします。

1. 推薦者は正会員または名誉会員とし、同一の候補者を複数の会員が連名で推薦することも可能です。
2. 会長候補者を推薦するには、推薦者の署名捺

印、推薦理由書、候補者の履歴書、業績リストなどを事務局へ提出して頂く必要があります。詳細は事務局までお問合せください。

3. 今回の会長選挙のためには、2008年11月12日までに、所定の書類を事務局に提出することが必要です。

問合せ先：日本統計学会事務局

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9大和ビル2階
（財）統計情報研究開発センター内
電話：03-5467-0483, e-mail：shom@jss.gr.jp

11. 2009年度統計関連学会連合大会について

2009年度統計関連学会連合大会は同志社大学文化情報学部（京田辺キャンパス）において、2009年9月6日から9日の間開催されることが決まっ

ております。詳細については次号に関連記事を掲載する予定です。

12. 第76回日本統計学会総会報告

日時：2008年9月8日（火）12：40～13：40

場所：慶應義塾大学理工学部

矢上キャンパス12棟109教室

司会進行の田中勝人理事長より開会の挨拶がなされた。

1. 会長挨拶：

北川源四郎会長より挨拶がなされた。

2. 議長選出：

議長として若木宏文会員が選出された。

3. 2007年度事業報告・同決算報告、および会計監査報告：

川崎能典庶務担当理事より、資料（付表）に基づいて事業報告案および決算報告案の説明があり、引き続き久保川達也監事よりより会計報告がなされ、承認された。

4. 評議会からの報告：

北川源四郎会長より、2006・2007年度第5回評議員会（9月7日開催）での議事に関して報告があり、2010年度連合大会参加の決定や未納会員についての対応方法などについて報告がなされた。

5. 2008年度事業計画・同予算：

倉田博史庶務担当理事より、資料（付表）にもとづいて事業計画案・同予算案の説明がなされ、

承認された。

6. 第77回大会について：

北川源四郎会長より、2009年度第77回大会を同志社大学文化情報学部（京田辺キャンパス）において、2009年9月6日から9日の間で、例年通り4日間の会期で開催する予定であることが報告された。

7. 名誉会員の推薦について：

北川源四郎会長より山本拓会員を名誉会員の推薦することが提案され、審議の結果、承認された。

8. その他：

田中勝人理事長より、理事の交代について下記の報告があった。田中勝人理事長の退任に伴い、岩崎学会員が新たに理事長に就任する。学会活動特別委員会主査に田村義保会員が、学会組織特別委員会主査に矢島美寛会員が、統計教育委員会委員長に渡辺美智子会員が就任する。川崎能典庶務会計担当理事の退任にともない山下智志会員がその後任として理事に就任する。

以上を持って総会は終了し、引き続き第13回日本統計学会賞、第4回統計教育賞、第2回研究業績賞、第22回日本統計学会小川研究奨励賞の授賞式が行われた。

2007 年度事業報告

(2007.4.1～2008.3.31)

2007 年度決算

(2008 年 3 月 31 日現在)
(単位 円)

(i) 貸借対照表

科目	借 方		貸 方	
	期首	期末	期首	期末
固定資産	180,471	180,471	学会自己資金	180,471
流動資産	12,817,692	13,909,894	学会活動積立金	5,000,000
現金	76,177	84,951	役員旅費補助積立金	200,000
振替口座	2,073,035	152,242	名簿作成積立金	600,000
預貯金	10,668,480	13,672,701	O A 機器積立金	1,100,000
			未払い金	0
計	12,998,163	14,090,365	繰越金	7,309,894
			計	12,998,163
				14,090,365

(ii) 収入

科目	細目	予算額 (単位円) 1)	決算額 (単位円)
今期繰入金		3,186,000	3,185,927
未払い金繰り入れ		2,732,000	2,731,765
学会活動積立金取崩		500,000	0
O A 機器積立金取崩		0	0
役員旅費補助取崩		100,000	0
名簿作成積立金取崩		600,000	600,000
会費収入	名譽会員・正会員 学生会員 謝及請求分	11,280,000 10,000,000 280,000	11,516,000 10,103,000 235,000
賛助法人費		1,480,000	1,178,000
団体会員費		160,000	160,000
科学研究費補助金 「研究成果公開促進費学術定期刊行物」		1,000,000	1,000,000
雑収入	雑誌購読料 利子収入 広告収入 その他	1,905,000 700,000 5,000 1,200,000	2,022,826 794,750 27,463 1,090,000
75 周年記念事業委員会和文誌出版助成金		1,000,000	1,000,000
計		23,943,000	23,616,518

- 日本統計学会第 75 回大会の開催
2007 年 9 月 6 日～9 日の 4 日間にわたり、統計関連学会連合大会の一環として神戸大学六甲キャンパスにおいて開催した。
- 第 75 回大会講演報告集の発行
連合大会の講演報告集として発行した。
- 日本統計学会春季集会 2008 を 3 月 1 日に開催した (会場：成城大学)。
- 会誌の発行
会誌 2 号[Vol.37 No.1 (6 月), No.2(12 月)], 和文誌 2 号[第 37 巻シリーズ J 第 1 号(9 月), 第 2 号(3 月)]を発行した。
- 会報の発行
No.131 (4 月), No.132 (7 月), No.133 (10 月), No.134 (1 月) を発行した。
- 賞の授与
第 12 回日本統計学会賞(2 名), 第 3 回日本統計学会統計活動賞(1 件), 第 3 回日本統計学会統計教育賞(2 件), 第 1 回日本統計学会研究業績賞(1 名), 第 21 回日本統計学会小川研究奨励賞を授与した。75 周年記念事業委員会により, 75 周年記念出版費(2 件)が授与された。
- 研究部会の活動
次の研究部会が活動終了となった。
「統計教育に関するカリキュラムと教育コンテンツの国際比較」(竹内光悦主査：2005 年 12 月発足, 2007 年 11 月終了)
次の研究部会が活動した。
「マーケティングへの統計科学アプローチ」(照井伸彦主査：2006 年 12 月発足, 2008 年 11 月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(國友直人主査：2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
- 研究分科会の活動
次の 2 分科会が活動した。
「統計教育部会」(渡辺美智子主査：2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(國友直人主査：2006 年 12 月発足, 2010 年 11 月終了予定)
- 各種委員会の活動
評議員会, 理事会, その他の各種委員会を開催した。

10. その他

- 会員名簿を発行した。
- 国際交流を推進した。
- インターネット経由での情報発信を促進し, 特に英文のホームページを充実させた。
- 入会者拡大の方策を検討した。
- 会誌購読拡大の方針を検討した。
- 学会誌のバックナンバーを電子ジャーナル化するための準備を進めた。
- 日本統計学会出版費を新設した。

(iii) 支出

科目	細目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
印刷費	会誌未払い分 (J36-2)	13,137,000	10,683,638
	会誌(37-1,37-1,37-2)	2,487,000	2,486,595
	会報 (131号～134号)	8,160,000	6,127,503
	名簿印刷費	1,000,000	911,940 ⁹⁾
	その他	830,000	680,000
大会開催費		660,000	477,600 ¹⁰⁾
	春季集会開催費	140,000	258,882
研究会会費	総観会	100,000	218,882
		40,000	40,000
常学運営会合費		100,000	40,000 ¹¹⁾
	評議員会	410,000	139,769
	特別委員会	110,000	42,750
	統計教育委員会	40,000	0
	会誌編集委員会	20,000	0
経費	理事會	40,000	0
	その他	200,000	97,019
事務費		0	0
	一般事務人件費	1,230,000	306,097
費	校正編集事務人件費	500,000	2,700
	校送事務人件費	120,000	160,000
	事務用品	250,000	84,000
	事務室借料	250,000	48,837
	その他	100,000	0
		10,000	10,560 ¹³⁾
		2,340,000	2,340,000
学会事務業務委託費		2,995,000	1,919,797
	会誌未払い分 (J36-2)	245,000	245,170
	会誌(37-1,37-1,37-2)	680,000	528,600 ¹⁴⁾
	会報 (131号～134号)	720,000	470,250
	名簿送料	150,000	127,340
役員旅費補助	その他通信・郵送料	1,200,000	548,437 ¹⁵⁾
		100,000	26,800
各種分担金		227,000	192,293
	日本経済学会連合	35,000	35,000
ネットワーク維持費	IS I	102,000	67,293
	機関型連合	50,000	50,000
	統計関連学会連合分担金	40,000	40,000
国際交流促進費		62,000	12,075
事務局転写準備費		100,000	0
名簿作成積立金		200,000	0
予備費		300,000	300,000
		2,302,000	87,273 ¹⁶⁾
繰越金		0	7,309,894 ¹⁷⁾
	計	23,943,000	23,616,518

(2007年度決算注)

- 予算額は千円未満四捨五入で記載。貸借対照表参照。
- 新入会員分(47名)を含む。
- 賛助法人17件。賛助法人費は入会時の正会費の10倍を1口とし、賛助法人費を値上げしていない。従って、各社1口の年会費は異なる。
- 団体会員4件。(1件40,000円)
- 定期購読国内販売およびバックナンバー売上。
- 財団法人統計情報研究開発センター名義の利息を含む。
- 名簿の広告掲載料を含む。
- 出版者著作権協議会・科学技術振興機構より入金。
- 131号26頁、132号29頁、133号35頁、134号22頁、計112頁。
- 会誌、会報発送用の角3封筒、定形封筒、選挙の印刷物及び総会資料等。
- 「マーケティングへの統計科学アプローチ」研究部会への送金が2008年度にずれ込んだことに伴い、ゼロ決算となった。
- 「統計教育」分科会、「計量経済・計量ファイナンス」分科会。
- 事務局員の交通費。
- 寄贈、国内会誌販売のための送料は含まない。
- 新入会員への名簿・会誌・会報等の送料、韓国統計学会への会誌送料、会員への諸郵便料、広告募集のための送料、評議員への送料、重要書類の書留料金、電話・Fax代、振込手数料、寄贈・会誌販売のための送料、理事への宅配便等。
- 招待者(賛助会員11名)の大会参加費負担分、弔電、併花代。
- 繰越金には、会誌(37-2)の未払い金1,351,588円と、その郵送料未払い金160,860円が含まれる。

会計監査報告書

2008年7月16日

日本統計学会会則第22条に基づき、2007年4月1日より2008年3月31日までの会計監理を監査した結果、決算書の通り相違ないことを認めます。

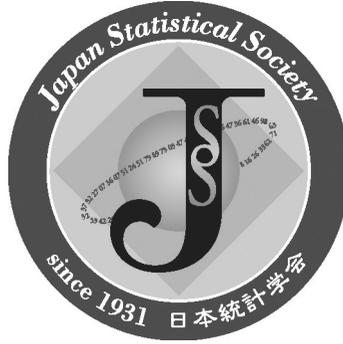
監事

久保川 達也
瀬尾 隆

2008年度事業計画

(2008.4.1～2009.3.31)

1. 日本統計学会第76回大会の開催
2008年9月7日～10日の4日間にわたり、慶應義塾大学矢上キャンパスにおいて開催する。
今回も統計関連学会連合大会の一環として開催する。
2. 第76回大会講演報告集の発行
連合大会の講演報告集に含まれる。
3. 会誌の発行
欧文誌3号[Vol.38 No.1-2 (6月), No.3(12月)], 和文誌2号[第38巻シリーズ]第1号(9月), 第2号(3月)]を発行する。
4. 会報の発行
No.135 (4月), No.136 (7月), No.137 (10月), No.138 (1月) を発行する。
5. 賞の授与
第13回日本統計学会賞, 第4回日本統計学会統計活動賞, 第4回日本統計学会統計教育賞, 第2回日本統計学会研究業績賞, 第1回日本統計学会出版賞, 第22回日本統計学会小川研究奨励賞を授与する。
6. 研究部会の活動
「マーケティングへの統計科学アプローチ」(黒井伸彦主査:2006年12月発足, 2008年11月終了予定)
2008年12月に活動を開始する部会を募集する。
7. 春季集会の開催
8. 研究分科会の活動
「統計教育部会」(藤辺美智子主査:2006年12月発足, 2010年11月終了予定)
「計量経済・計量ファイナンス分科会」(岡友直人主査:2006年12月発足, 2010年11月終了予定)
新規に活動を開始する分科会を随時募集する。
9. 各種委員会の活動
評議員会, 理事会, その他の各種委員会を開催する。
10. その他
 - (i) 国際交流を推進する。
 - (ii) インターネット経由での情報発信を促進する。英文のホームページを充実させる。
 - (iii) 統計関連学会連合の事業推進に協力する。
 - (iv) 入会者拡大の方策を検討・実施する。
 - (v) 会誌購読拡大の方針を検討・実施する。
 - (vi) 学会誌のバックナンバーの電子ジャーナル化を進める。
 - (vii) 評議員選挙, 会長選挙を実施する。



2008年度予算

(1) 貸借対照表 (2008年4月1日現在) (単位 円)

借	目	方		貸	目	方	
		期	直			期	直
固定資産		180,471		学会自己資金		180,471	
流動資産		13,909,894		学会活動積立金		5,000,000	
現金		84,951		役員旅費補助積立金		200,000	
振替口座		152,242		名簿作成積立金		300,000	
預貯金		13,672,701		O A機器積立金		1,100,000	
				繰越金		7,309,894	
計		14,090,365		計		14,090,365	

(11) 収入 (単位 千円)

科	目	細		目
		目	直	
今期繰入金		7,310		7,310 ¹⁾
学会活動積立取崩		500		500 ²⁾
O A機器積立金取崩		0		0
役員旅費補助取崩		100		100
名簿作成積立金取崩		0		0
会費収入		11,240		
				名譽会員・正会員 10,000
				学生会員 240
				週及請求分 1,000
補助法人費		1,480		1,480
団体会員費		160		160
科学研究費補助金		900		900
「研究成果公開促進費学術定期刊行物」				
雑収入		1,820		
				会誌購読料 790
				利子収入 30
				広告収入 1,000 ³⁾
計		23,510		23,510

(2008年度予算 注)

- 繰入金には、会誌(J37-2)の未払い分1,351,588円とその郵送費未払い金160,860円が含まれる。
- 赤池記念号(JISS Vol. 38 No. 1)の出版に伴うページ増を見込んだ印刷費確保のための取崩
- 会報の広告掲載費1000千円

(iii) 支出 (単位 千円)

科	目	細		目
		目	直	
印刷費		12,512		
				会誌未払い分 (37巻12号) 1,352
				会誌 (88巻 1,2,3, J1, J2号) 9,500
				会報 (135-138号) 1,000
				名簿印刷費 0
				その他 660 ⁴⁾
大会開催費		240		
				春季集会開催費 200
				懇親会 40 ⁵⁾
研究部会費		300		300
研究分科会費		100		100
学会運営会合費		410		
				評議員会 110
				特別委員会 40
				統計教育委員会 40
				会誌編集委員会 40
				理事会 200
事務費		1,230		
				一般事務人件費 650
				校正編集事務人件費 120
				発送事務人件費 250
				事務用品 100
				事務室借料 100
				その他 10 ⁶⁾
学会事務業務委託費		2,340		2,340
通信・郵送費		2,921		
				会誌送料 840
				会誌送料未払い分 (37巻12号) 161
				会報送料 720
				名簿送料 0
				その他通信・郵送料 1,200
役員旅費補助		100		100
各種分租金		192		
				日本経済学会連合 35
				I S I 67 ⁷⁾
				横断型連合 50
				統計関連学会連合 40
ネットワーク維持費		62		62 ⁸⁾
国際交流促進費		100		100
名簿作成積立金		300		300
予備費		2,703		2,703
計		23,510		23,510

(2008年度予算 注 続き)

- 会誌と会報などの発送用封筒や入会のお誘いの印刷など。
- 学会正費 (統計学会費、研究業績費、統計活動費、統計教育費、出版費)、小川費の懇親会招待分。
- 事務員の交通費。
- 2007年度分未払い費を含む。
- ドメイン使用料、学会サーバー委託費。

13. 研究部会新設公募

統計学の研究活動を助成するため、日本統計学会が1954年に研究部会制度を設けて以来、これまでに多くの研究部会が誕生し、統計学の発展に寄与して参りました。この制度は、公募制をとり、原則として年1ないし2件が評議員会の承認を得て発足します。継続期間は2年間、助成額は1部会につき年間10万円で、部会設置期間終了時には、会員への研究成果の公表と評議員会への事務報告が義務付けられています。また、研究会の開催を本学会のホームページに掲載することになっています。

今年も研究部会を公募いたしますので、ふるってご応募ください。

締切日：2008年11月12日

応募先：日本統計学会担当

〒107-0062

東京都港区南青山6-3-9大和ビル2階

(財)統計情報研究開発センター内

Tel & Fax：03-5467-0483

E-mail：shom@jss.gr.jp

応募書類の書式などは応募先までお問い合わせください。採否は、11月に開催予定の評議員会にて審議の上、決定いたします。

なお、研究分科会（設置期間4年間）については随時募集しております。こちらにも積極的にご応募ください。研究分科会の趣旨等については会員名簿（2007年12月）の記載または学会ホームページをご参照ください。

14. 研究集会案内

●International Conference on Econometrics and the World Economy開催のご案内

目的：福岡大学「先端経済研究センター」の設立を記念し、また計量経済学及び世界経済分析に関する国際的な研究交流を図るため、

“International Conference on Econometrics and the World Economy”を福岡にて開催します。

日程：平成21年3月23日（月）及び24日（火）

会場：福岡大学

招待講演者：

Dr Shaohua Chen

(Senior Statistician, Senior Information Officer, World Bank)

Dr Jurgen A. Doornik

(Research Fellow in Economics, University of Oxford)

Prof. David F. Hendry

(Professor of Economics, University of Oxford)

Prof. Charles Y. Horioka

(Professor of Economics, Osaka University)

Prof. Siem Jan Koopman

(Professor of Econometrics, Vrije Universiteit Amsterdam)

Prof. Shi Li

(Professor of Economics, Director of Income and Inequality and Poverty Research Centre, Beijing Normal University)

報告論文募集：本コンファランスでの報告論文を広く募集します。計量経済学の理論及び実証に関する研究、世界経済動向の分析に関する研究が報告論文の対象となります。詳細は以下のホームページをご覧ください。

http://www.econ.fukuoka-u.ac.jp/researchcenter/call_for_papers.html

報告論文（要旨）締切：平成20年10月31日（金）

報告論文（本文）締切：平成20年12月15日（月）

15. 新刊紹介

本会会員からの投稿による新刊図書の紹介記事を掲載します。

●大西 広・藤山英樹 著

『経済＝統計学：基礎理論の理解と習得』

出版社：昭和堂，2008年4月25日，2300円

標本から全体を推し量るという統計学には、「便益」と「コスト」のバランスをとるという経済学と密接な関係を持つ思想的背景が存在する。この関係を明らかにしながら、数学的な導出も詳細に、各概念を解説した。

●刈屋武昭・勝浦正樹 著

『統計学 第2版』東洋経済新報社

主に社会科学系の学部生や統計学を学習し直したいという社会人・大学院生を対象に書かれた統計学の入門的な教科書である。掲載されたデータや練習問題の解答は、ウェブからダウンロードできる。

●Alexander J. McNeil, Ruediger Frey, Paul Embrechts 著

訳者代表：塚原 英敦

「定量的リスク管理－基礎概念と数理技法－」

出版社：共立出版，2008年7月，8,400円

●Michel Crouhy, Dan Galai, Robert Mark,

訳者代表：三浦 良造「リスクマネジメント」

出版社：共立出版，2004年3月，7,875円

●Michel Crouhy, Robert Mark, Dan Galai 著

訳者代表：三浦 良造

「リスクマネジメントの本質」

出版社：共立出版，2008年8月，5,775円

以上の3冊は、特に数理統計学のアプローチが重要な地位を占める、金融のリスク管理のために使われる計量的方法について、3冊がそれぞれ理論体系を、実務体系を、経営上の観点からの位置づけを解説しています。3冊まとめて読むことでこの問題分野に数理統計学的方法がいかに貢献しているかがわかります。大学院の教育研究にとっても新しい重要な分野です。

16. 学会事務局から

理事会の現メンバーについて

9月の大会を期にメンバー交代があり、理事会のメンバーと役割分担は現在下記のとおりとなっております。

北川源四郎（会長）、岩崎学（理事長）、谷口正信（会誌編集：欧文）、渡部敏明（会誌編集：和文）、内田雅之（広報：HP）、福地純一郎（広報：会報）、前園宣彦（渉外：海外）、江口真透（渉外：一般）、田村義保（渉外：プロジェクト研究）、勝浦正樹（大会：プログラム）、稲葉由之（大会：プログラム）、橋本紀子（大会：運営）、橋口博樹（大会：運営）、倉田博史（庶務会計）、山下智志（庶務会計）、各務和彦（庶務会計）、清水泰隆（幹事：サーバ）、久保田貴文（幹事：ウェブ）

学会費払込のお願い

2008年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います。会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします。速やかな納入にご協力をお願い申し上げます。また便利な会費自動払込制度もご用意しています。次の要領を参照の上、こちらもご活用下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2F
財団法人統計情報研究開発センター内

日本統計学会係

Tel & Fax : 03-5467-0483

E-mail : shom@jss.gr.jp

入会者

石原庸博, 色川卓朗, 久布白寛, 久保田貴文, 今野紀子, 白石博, 野呂拓矢, 孕石真浩, 本田哲弘, 本橋永至, 安井清一, 林長青 (敬称略)

退会承認

青木隆佳, 杵沢隆, 花安繁郎, 吉田信一 (敬称略)

現在の会員数 (2008年9月30日)

名誉会員	21名
正会員	1,437名
学生会員	47名
総計	1,505名
賛助会員	18法人
団体会員	4団体

17. 投稿のお願い

統計学の発展に資するもの, 会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。以下のような情報も歓迎いたします。

● 来日統計学者の紹介

訪問者の略歴, 滞在期間, 滞在先, 世話人などをお知らせください。

● 博士論文・修士論文の紹介

(1) 氏名 (2) 学位の名称 (3) 取得大学 (4) 論文題名 (5) 主査または指導教員 (6) 取得年月をお知らせください。

● 求人案内 (教員公募など)

● 研究集会案内

● 新刊紹介

著者名, 書名, 出版社, 税込価格, 出版年月をお知らせください。紹介文を付ける場合は100字程度までとし, 主観的な表現は避けてください。

できるだけe-mailによる投稿, もしくは, 文書ファイル (テキスト形式) の送付をお願い致します。

原稿送付先:

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

学習院大学経済学部

福地 純一郎 宛

Tel : 03-5992-2085

Fax : 03-5992-1007

E-mail : koho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

● 統計学会ホームページURL :

<http://www.jss.gr.jp/>

● 統計関連学会ホームページURL :

<http://www.jfssa.jp/>

● 75周年記念事業ホームページURL :

<http://www.math.chuo-u.ac.jp/~sugiyama/jss75>

● 住所変更連絡用e-mailアドレス :

meibo@jss.gr.jp

● 広報連絡用e-mailアドレス :

koho@jss.gr.jp

● その他連絡用e-mailアドレス :

shom@jss.gr.jp